

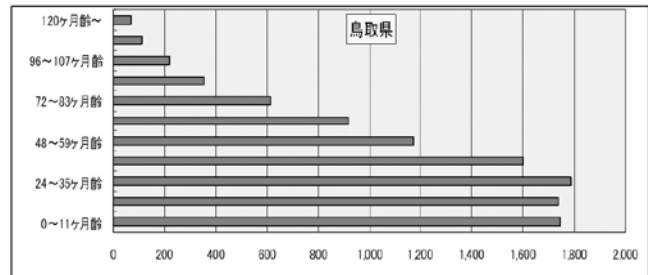
②月齢別飼養頭数

我が広島県には「後継牛がない」という話がたまに出ますが、同じようにインターネットのJ-MILKのホームページに各地の月齢別の飼養頭数等の各種情報閲覧をすることができます。アクセス先のアドレスは次のとおり。

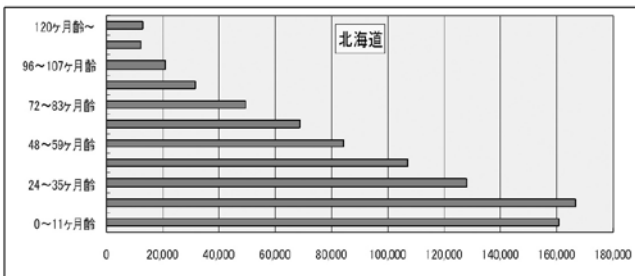
<http://www.j-milk.jp/expertise/>

dairy_cattle/9fgd1p000000ajab.html

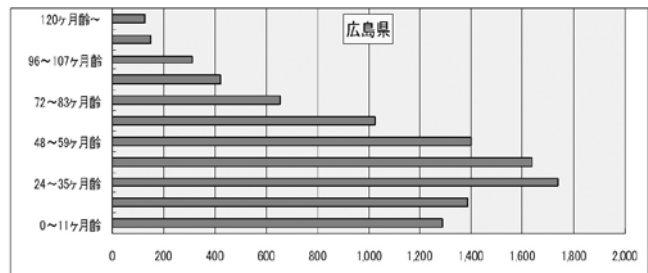
その中の乳用種(雌)の県別・月齢別飼養頭数によると、



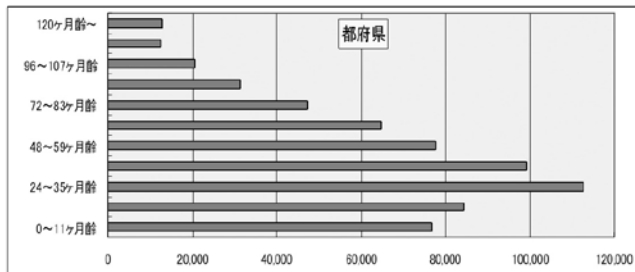
しかし、中国地区においても例外はあり、昨今よく話題となっている鳥取県は、豊富な若齢牛を保有していることが一目瞭然です。もっとも、これらの資料は耳標(牛個体識別情報)による出生報告や移動報告を基本にしているため、県内に大きな育成牧場がある鳥取県は県内に若齢牛が留まり、広島県が北海道に預託すると北海道の牛としてデータの集計されています。



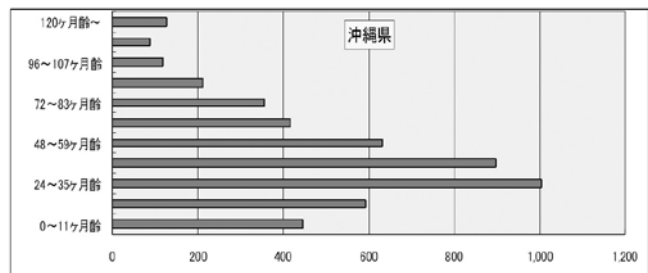
後継牛を自己調達し、府県に販売まで行っている北海道は見事な末広がりなピラミッド型の人口構成(牛口構成?)であることがわかります。



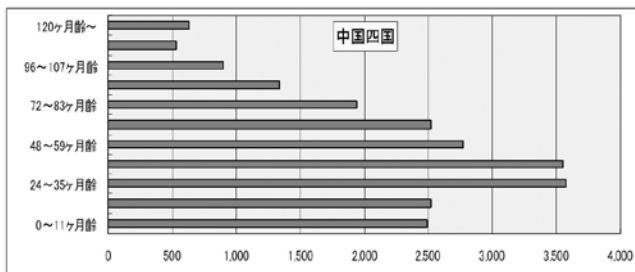
若齢牛は鳥取県に比べて少ないですが、高齢牛の層はかなり厚く牛は大事にされているのが分かります。



それに比較して、後継牛を北海道に頼りがちな都道府県では未経産牛にあたる月齢の牛が少ないのが分かります。



先の平均淘汰月齢に表されていたとおり、働き盛りの牛以外が極端に少ないことが一目瞭然です。



中国四国地区では、ほぼ全国平均と同様な状況にあります。

【まとめ】

後継牛は酪農経営の将来の収入基盤を支える貴重な宝であります。外部から購入するとすれば市場価格に左右され、調達のための資金準備も必要となります。将来とも安定した酪農経営を継続していく上でも、後継者問題の解決が急務です。

今一度、「後継牛の対策」と「夏場を迎える前に現保有牛に対する『もう一産』の対策」に、再度目を向けて戴きたいと考えます。

事件は現場で起きています



牛はどのくらい 生かされる？

広酪事業推進課 係長 大島達夫

昨今、様々な会議や研修の場で、生乳生産基盤が脆弱化している現実から「如何に後継牛対策を講じるべきか」に関する意見を耳にすることが多くあります。

今回は、他県との比較も含めて、乳用牛の平均産次や後継牛状況等に関して触れます。

1. 平均産次

時々、話題になるものとして検定情報等にある『平均産次』があります。府県で長いものは3.2産、全体では3産以下となっています。では、牛群中の経産牛が3産程度以下しか出産していないのかというと、「いやいや、それはあくまでも平均だから」という話が何回も行われます。

(例) 広酪牧場の平均産次

同牧場は小規模な酪農経営で、飼養する経産牛頭数は8頭。事故率は非常に低く牛は必ず4産出産します。しかし、同牧場では乳質や収益性のことを考え、4産以降の牛は販売することを原則としています。

今、牛舎には初産が2頭、2産も2頭、3産も2頭、4産も2頭。

平均産次の計算は(1産+1産+2産+2産+3産+3産+4産+4産)/8頭=2.5産となります。

実際には受胎せず2産を迎えない牛もおりますし、代わりに牛舎内には7産・8産を超える貢献牛もおりますので、簡単には算定しづらいところがあります。

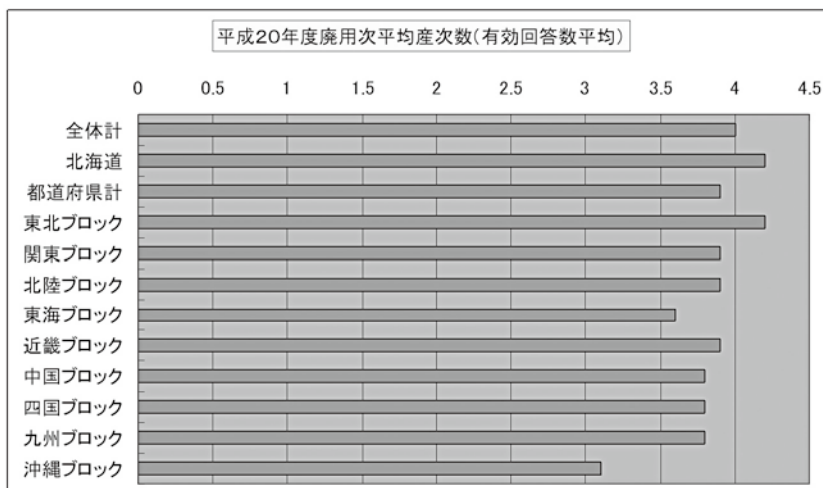
2. 公表データ

①廃用時の産次

昨今はインターネットで各種の統計情報が公表され、情報の入手が容易になっております。(社)中央酪農会議が平成21年に実施した「平成21年度 酪農全国基礎調査結果報告書」が公表されています。アクセス先は次のアドレス。

<http://www.dairy.co.jp/archive/kulbvq0000001g70-att/kulbvq0000001g7b.pdf>

その調査資料には、各指定団体別に整理された「平成20年度廃用時の平均産次数」があります。公表値をグラフ化すると以下ようになります。



有効回答の中からの平均で、大型牧場からの回答率は不明ですが、全国平均では約4産、北海道では4.2産と4産を超えていることがわかります。我々の**中国ブロックの廃用時の平均産次は3.8産**で都府県平均の3.9産を若干下回る結果となっています。もう少しの長命化を図りたいものです。当時県内の需要に対し、過不足を起こさないことが必要であった沖縄ブロックでは長命連産はあまり重要でなかったためか、平均産次は飛びぬけて低いものとなっています。